

神が腰掛けた岩の下手に小さな池を残して一本の小川となつて大分川の本流へと注いで流れ下ってしまった。この小さな池が今の金鱗湖と云つて半湯半水の池で、由布院名所の一つになっている。

水が引いたのを見届けた女神は、各地から民を集め、この盆地を開拓して豊饒な実りをもつ美田としたのである。柚富郷という大きな村が出来あがり、毎年、豊沃な土地には黄金の穂波を秋風が運んできた。村人は柚富郷開拓の大恩人である宇奈岐日女の神徳を崇めて社殿を創建したのが、宇奈岐日女神社で、別名六所宮である。

一方、大脚力で前徳野の崖壁を蹴破つた権現を同時に恩人として祀つたのが、いま前徳野に鎮座まします蹴裂権現社であり、ご神体は権現が最初に蹴つた石であると云われている。

六所宮の神事でお神輿は、蹴裂権現の土木工事を眺められた女神が腰掛けられた大岩に、御神幸されるのである。

菡海漁談

脇 蘭 室（抜粹）

鶴見山は海岸を距こと一里ばかり、高峻由布に比しては譲る所あり、火脈の発動は更に甚し。山上に池あり。沸熱殊に盛にして、煙氣の騰起する事白雲の如し。昔時地変によりて、人死し家流れし事あり。享保年中には山潮出て、田圃村落悉く壊亡し、人民馬牛多く溺死せりとぞ。今より数年前にもかくの如き変あり。されど此所の人民、前事に創艾して、地を擇て村を移したるを以て其災輕かりしとぞ。この躍石と称する巨石あり、時ありて自躍りて移ると云。其響數十丁外に聞ふとなり。予いまだ石を見ざれども、響と云ものは少年の時はるかに聞たることあり。

山下には温泉所在に出るなり。中にも南鉄輪村には、鬱蒸の気を蔵め包み、材を構へ草土を覆ひて窟の如くし、

藁を布き石を枕とし、疾痛ある者偃臥して此氣に蒸すに、甚快く験を得こと多しとなり。此里には地獄と称する沸熱の泉甚多く、或は人家の壁柱の根などにも煙を出す所あり。菜蔬を煮、麻芋を蒸などの用に供して便利なり。

偶來り觀る者は、殊に驚怖する事にて、地獄原と云は道路狭くして、左右に方五六尺一二丈の熱泉數十、各泥を躍し、湯を起し、脚下に響て煙氣臭惡なること鼻を穿つが如し。隣近の地往々湯池あり。海地獄、紺屋地獄、鬼山地獄、園内坊など称するもの甚だ衆し。血の池と称するは赤の湯と呼て、豊後風土記に載たる赤湯泉なり。二十余年前までは赤色なりしが、變じて淡青色となれり。又野田村に天王の湯と称するものあり。景行帝西巡の日浴したまひしとか云ひ伝う。温泉二つあるが過熱なり。

海浜に出て、亀川と云には冷水なくして人家に用るもの皆湯なり。流るゝ湯に小魚生じ、水草華く、奇と謂べし。古市と云には、潮退きたる時汀沙より烟立つ。こゝを鑿ば温泉湧出、人々自ら沙を左右に推て石莖を敷き石を枕にして臥すに、其身を蔵すほどに温泉湛ふ。熱すればしばらく避て、又浴するに煖適なり。冷なれば浴しな

がら沙を探れば、底より熱氣加わりて意の如く煖適なり。久しく浴して厭ふ時は、所を移して又鑿ち、新湯を開く。

西面すれば、鶴見山以下其他の岡巒、遠くは数里の外山野、みな目中に在り。東顧すれば海洋涯なく、巨船輕舟みな呼ぶべし。南北行路を通じて、邑里交錯す。漁釣樵蘇の状、過客征馬の態みな臥して悉するを得。日を避け雨を禦ぐの用、唯一傘を手にして足る。天下の至約にして大觀を成し、至清にして奇樂を取る。いづれの物かこれに加ふべき。潮來れば温泉隱没處所を失す。潮退けば渺々平汀初に復し、浴者意に随て新泉を發す。此地稍人家を離れ、酒店なく茶房なし。もし瓢酒を携て沙中に置けば、温にして熱せず。僻地なるを以て衆群の喧きを見ず、温泉中の佳境とすべし。

○石垣原は鶴見山の麓に在て、眩野なりしが、洪水の出けるより、唯沙石荒草渺茫たり。慶長五年大友氏兵を起し立石に抛たるを、黒田侯の軍石垣原に相戦、遂に大友氏を擒せし古戰場なれど、今は人馬の馳驅すべき處に非ず。路傍に大友の長臣吉弘嘉兵衛の墓あり。義烈なる士

にて、忠諫用ひられず、終に鬪死したるを、其地に墓を
営みたり。ここに松樹の路上に横たはりたるありて、墓
前を過る者馬を下らざることを得ざりしかば、下馬松と
呼て、おのずから地名の如くなりぬ。今より二十年ばか
り以前に枯失せり。

此所よりしばらく北に往て村あり。北石垣と称す。民
家の後に鬼の窟と云ものあり。外より見れば、唯竹樹あ
る阜の如く、近く立寄れば、巨石をたゝみて門戸の如き
あり。炬火を執て入るに、石窟を構へ成して、凡数十人
を坐せしむべし。高さも大概径の丈尺にひとしかるべく、
上を覆たる石は平なる大石を並て、人力にあたふまじと
見ゆる者なり。是を男鬼の窟とす。女鬼の窟も相並て在
り。石門の狭隘なるより入るに、二室あり。奥なる方稍
広くして、一石牀を側立。土俗これを女鬼の産台と云ひ
傳ふ。何の世に造り何の用なる事を知るものなし。上代
の穴居の遺物にや。或人の説は、古昔豪西を葬たる石槨
ならんと云。女窟の中の石牀は石棺なるかもしらず。上
国にも西州にもかゝる類ありて、石槨と云伝る者聞れば、
さに非ずとも言いがたし。又按ずるに日本書紀、景行紀

に見へたる鼠の窟と称する者あり。紀に曰

到速見邑有女人曰速津媛為一處之長其間天
皇車駕而奉迎之謠言茲山有大石窟曰
鼠石窟有二蜘蛛住其石窟一曰青二曰白

速見郡に石窟と称すべきもの今存せずもしは此所にやと
おもへども、紀の後段に、

襲石窟土蜘蛛而破千稻葉川上

とあれば、此所には非るなり。近き辛酉の秋、鶴見の里
人強盜を追て捕へんとするに、民家に入て見失ひたり。
因て此家を探索するに、牀の下に又席を布て人を居らし
むべくし。土中を鑿り穿て屋の後の窟の中に抜け出る設
けあり。事乃ち発覚して、此主も因になりしなり。